

赤十字NEWS 10

Japanese Red Cross Society NEWS

OCTOBER.2024.#1013

全国に557の 無医地区*。

*半径4km以内に人口50人以上が居住していて、かつ、医療機関が近隣にない地域のこと

北海道

64地区



HOKKAIDO

広島県

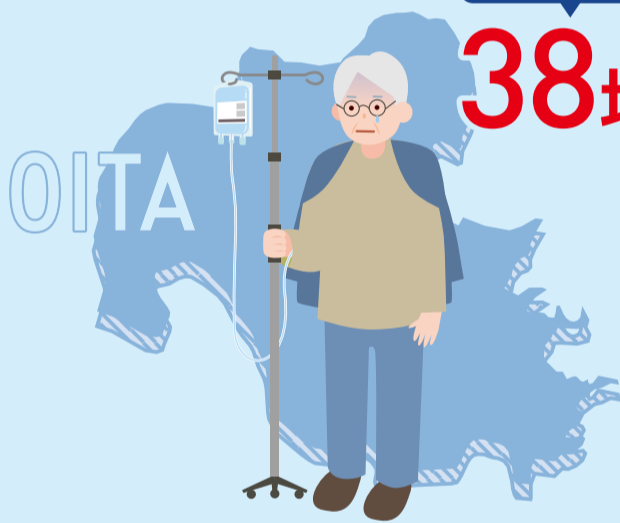
53地区



HIROSHIMA

大分県

38地区



OITA

無医地区が多いのは…

28地区	島根県	23地区	高知県
26地区	熊本県	21地区	岡山県
24地区	岩手県	17地区	愛知県・福岡県

出典:厚生労働省「令和4年度無医地区等及び無歯科医地区等調査」の概況

ともして

特集 | ▶ P.2

無医地区に灯をともして

TOPICS

～「防災の日」を前に日赤が大規模災害への国民意識を調査～
いま災害が起こったら…
備えは大丈夫!?

P.4-5

連載

万博と赤十字 P.4
献血ハートフルストーリー P.5

AREA NEWS

- [秋田] 2年連続、大雨災害に見舞われた秋田中学生が「災害エスノグラフィー」体験
- [千葉] 4年ぶり! JRCメンバーがネパールで国際交流
- [京都] 救急法は15歳から? 「何歳でも人は助けられる!」小学校・高校で救急法講習 /他 P.6-7

WORLD NEWS

台湾東部沖地震から半年 赤十字救助ボランティアの活躍 P.8

PRESENT!!

七金星セット

プレゼント!
5名様



詳しくは
P.7をCheck! ▶

SPECIAL FEATURE

特集

ともしび

無医地区に灯をともして

移動診療車が行く!～日赤へき地医療拠点病院の活動～

学校がなくなる、商店がなくなる、そして医者もいなくなる……。それでも、受け継いできたその土地で生きていく人々がいます。今回は、へき地で暮らす人々に寄り添う、広島県・庄原赤十字病院の取り組みをご紹介します。



左) 田んぼの真ん中に建つ集会所で診察。「患者さんには地元の方言で親しみやすく話しかけることを意識しています」と竹村医師
右) 収穫前の青い稲穂が広がる集落に、山道を越え移動診療車がやってくる



へき地医療とは?

へき地とは、山間部や離島など、交通条件および経済的、社会的条件に恵まれない地域を指します。そういった地域では、医療の確保が難しく、無医地区も少なくありません。日赤では全国に91ある赤十字病院の中で、17施設が国から「へき地医療拠点病院」として指定されています。

「この地域は、自分たちで守る」庄原赤十字病院の巡回診療

広島県の無医地区数:計53カ所



広島県令和4年度無医地区調査結果より

無医地区を有する市町:9市町

広島県は、全国の中でも無医地区が多く、特に、中国地方のほぼ中央に位置する庄原市は、過疎化・高齢化が進むとともに、無医地区が増加し、社会的環境は厳しさを増す一方です。庄原赤十字病院では、約40年前から巡回診療を開始し、10年前からは移動診療車を導入して、週に2日、1日あたり2カ所のペースで、6つの地域の巡回診療を行っています。なお、この移動診療車は、庄原市に隣接する2市・1町でも活用され、庄原赤十字病院を含めて5つの病院が連携し、連日運行しています。



庄原赤十字病院
総合診療科医師
たけむら ゆり
竹村 優季さん



庄原赤十字病院
医療社会事業課長
ふじわら ゆかり
藤原 由佳里さん

住み慣れた場所で、この先もずっと生活できるための手助けを

庄原赤十字病院に勤務して1年目。出身は広島市で、研修医時代にこの病院で巡回診療の実習を経験したことが、今につながっています。巡回診療では、大きい検査をすることはできませんし、持ち運び薬にも限りがあります。月に1度のペースで診ていく中で、気になることがあったら病院で検査してもらおうのですが、山間部で暮らす方々は病院に来るのも1日ばかりで、大きな負担になるので、来院検査の見極めを慎重にしています。巡回診療の担当になったばかりのころはあまり話してくださらなかった方が、家のことや仕事のことなども積極的に話してくれるようになってうれしいですね。皆さん高齢ですから畑仕事も無理をしてほしくないですが、育てている果樹や畑への思いを感じると、その人の人生に触れているような気持ちにもなります。健康はもちろん、その人が大切にしている、住み慣れた環境での生活を維持していくために、巡回診療が少しでも役に立つことを願っています。

「自分たちは忘れられていない」移動診療車が住民の心のよりどころに

私は庄原市で生まれ育ち、私自身も雪が積もると身動きが取れなくなる地域から病院に通勤しています。巡回診療を行っている帝釈地区は過疎化が進んで、今ではバスも予約しないと運行しないような不便な生活環境ですが、それでも、住人にはそこで暮らしたい理由があります。私たちが巡回診療を続けることで、「自分たちを気にかけてくれる人がいる。忘れられていない」という希望の光になればいいなと思っています。

AM 9:00

庄原赤十字病院を出発

出発の30分前から移動診療車に医療器具や薬を積み込む。医師、看護師、臨床検査技師、事務職員が1チームとなり出発。今回は2人の研修医も同行する。



庄原市帝釈地区 移動診療車による巡回診療に密着!

広島県内の53の無医地区のうち、23の地区が集中する庄原市。庄原赤十字病院にある移動診療車は、地域内の複数の病院が巡回診療で利用しているため、フル稼働。竹村医師の巡回診療の一日を追い、患者さんたちの声に耳を傾けました。

AM 9:45

庄原市帝釈診療所に到着

- 1 採血後の診察の様子。「病院での診療のようにシステムが整っているわけではないので、患者さんの状態が分かる聴診は特に大切にしています」(竹村医師)。研修医も見つめる。
- 2 採血は看護師が担当。人員の確保が課題のへき地診療では、庄原赤十字病院を退職したOG看護師が再雇用で活躍する。
- 3 採血された血液は、移動診療車内ですぐに検査にかけられる。臨床検査技師も病院OB。



患者さんの声



おとよしのり
表 良則さん・70代

今日は、いつもの血糖や血圧のチェックだけでなく、人間ドックで見つかった膀胱の精密検査の結果を聞きに来ました。不安でしたが結果良性だったのでホッとしました。この地域は高齢化率61%、80歳以上が4分の1にもなり、私を含め足が悪い人も多いので移動は大変です。皆、この巡回診療には大変感謝しています。



たなべ てるあつ
田邊 輝満さん・70代

妻が50代で大病をしたこともあり、夫婦共々できるだけ長く健康でいるために、気になることはすぐに相談したいと思っています。今日は内視鏡の予約を取りたくて。電子カルテが病院のシステムとつながっているの、すぐに検査の空き状況が分かり、予約も取れて助かりました。

PM 12:15

みど 庄原市集会所に到着

- 4 看護師も顔なじみなので、さまざまな相談を気軽な感じで話せる。
- 5 りんご農園を営むご夫婦の診察。「旦那さんを初めて診たのは、心不全による2カ月間の入院から帰宅した直後。そのころに比べたらかなり回復しました。いつも、りんごの世話を頑張らずしてしまうのを心配しています……」(竹村医師)。
- 6 高血圧、肝機能障害を抱える患者さんとは、次の検診時期の相談も。



いのう え のぶひさ
井上 信宏さん・80代

庄原赤十字病院まで行くのも移動にも時間がかかるし、病院でも長い時間待たなくてはいけないので1日ばかり。近くに来てくれるのは助かりますよ。月に1度ですが、同じ先生が診てくれるので安心です。



かわべ けいお
川邊 力男さん・90代
カツ子さん・80代

りんご農園を始めて約50年。畑仕事をしているとけがも絶えず、体力の限界も感じています。小さな苗から育て上げたりんごの木を見捨てられません。巡回診療に来てくれるおかげで、なんとか体のケアをしながら維持していくことができます。



PM 2:30

庄原赤十字病院に帰着

巡回診療こそ、へき地の“希望の灯”。地域の人々の生き方を尊重するために

巡回診療は40年ほど前から行っています。当初は週に1度の診療で20人もの利用者がいたものの、年々利用者が減り、院内でも「もう巡回診療は必要ないのではないか?」という意見が出ることがありました。利用者の声も聞いてみようという思いを傾けたところ「行かなくなったんじゃない。行けなくなったんだ」という意見が。ハッとしました。ある患者さんは「バス停まで4キロ歩いて、1日数本しかないバスに乗り、やっとのことで巡回診療が来る集会所にたどり着く」と、診療までの道のりが果てしなく遠いことを知らせてくれました。高齢になるほど、遠距離の移動が厳しくなる現実があります。打開策を思案しているところに、広島県から、地域医療再生基金を活用するアイデアの募集があり、病院職員から「移動診療車はどうでしょう?

バス型であれば、さまざまな地域に医療を提供することができる上、災害時には日赤の救護活動にも活用できます」と提案が。この意見が実を結び、移動診療車が誕生しました。病院が遠いならば、近い場所に居を移せばいいという考え方もあるかもしれませんが、私たちはそこに住む人たちのこれまでの人生や生き方を尊重していきたい。以前、救急車で運ばれてきた患者さんから「暗闇の中で赤十字のマークが灯っているのが見えてきたときに、救われた気持ちになった」という言葉をいただいたことがありました。まさに私たちの使命は、庄原市で医療の灯をともし続けること。そして、**無医地区の人々にとっては、移動診療車は希望の灯**。これからも、その灯を守り続けていきます。



庄原赤十字病院
院長
なかしま こういちろう
中島 浩一郎さん

T P I C S

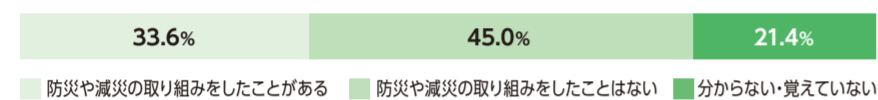
1 TOPICS

～「防災の日」を前に日赤が大規模災害への国民意識を調査～ いま災害が起こったら…備えは大丈夫!?

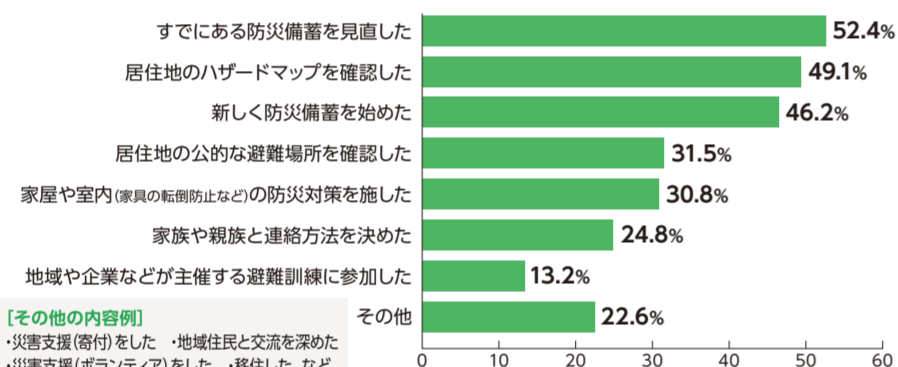
日赤では、9月1日の「防災の日」へ向けて、国民の防災・減災に関する意識と実態調査を実施。北海道、宮城、東京、愛知、大阪、広島、福岡に居住する10～60代以上の男女、合計1200人にアンケートを取りました。調査結果では、防災の日や防災週間をきっかけに、「防災・減災の取り組みをしたことがある」人は33.6%に留まり、能登地震のような直近の大きな地震を受けても、まだ「自分にも起こり

得ること」という認識には至っていないことが分かります。また、地域での防災訓練などへの参加の少なさ(13.2%)など、災害が起きた際に地域住民と協力し合う必要があるという認識が十分あるとは言えず、共助に課題があることも見えてきました。右記は、今年実施した連載「未来を守る防災ゼミナール」でも取り上げたテーマの一部です。今一度、自分の防災への意識、備えを見つめ直しましょう。

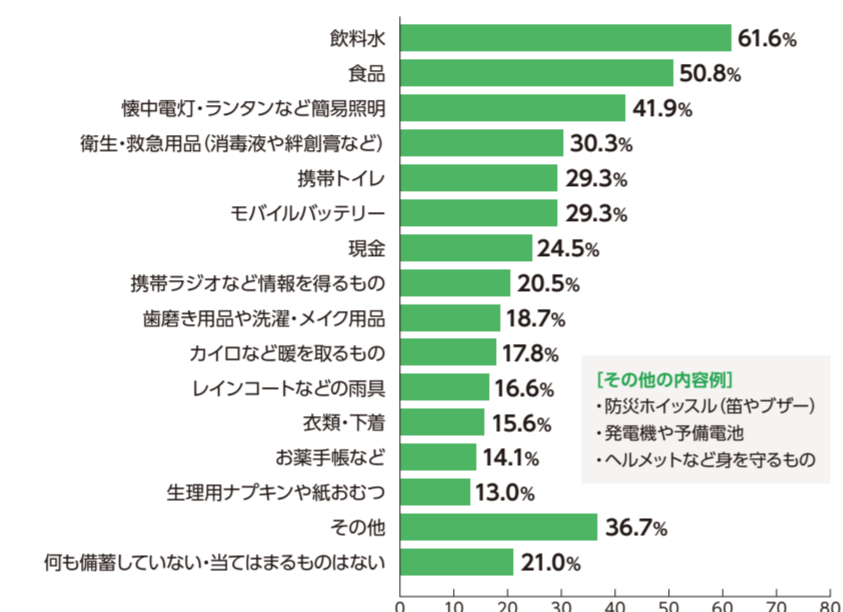
アンケート1 防災の日をきっかけに防災・減災の取り組みをしたことがありますか? (n=1200)



アンケート2 防災の日をきっかけに行った防災・減災の取り組みは? (n=403)



アンケート3 防災のためにどんなものを備蓄していますか? (n=1200)



日本赤十字社「防災の日に関する意識調査(2024年)」より抜粋(令和6年8月29日発表。日赤WEBサイトに公開) 調査対象:北海道・宮城・東京・愛知・大阪・広島・福岡に居住する男女1200人 ※10代～60代以上、各世代×男女100人ずつ

1 「厳寒期や真夏に被災したら…」 季節によって必要な備えは変わる

厳寒期ならば低体温症、真夏ならば熱中症など、災害時は二次的な被害も。また、乳幼児や高齢者のいる家庭によって、必要なもの、なくては困るものが変わってきます。さまざまな状況を想定して備えておきましょう。(防災ゼミvol.1より)



2 家族間でどこに避難するか、どのような手段で 連絡を取り合うか決めていますか?

携帯電話が使えない場合に備え、安否確認の方法を決めておくのも大事。伝言ダイヤルのように被災地外の親戚などに家族の居場所や状況を伝えるのも良い方法です。「公衆電話から叔母の家にかけ、伝言する」など決めておきましょう。(防災ゼミvol.4より)



防災ゼミナールから学ぶ これだけはおさえておきたい、 命を守るためのヒント

過去の防災ゼミナールの記事はこちらをチェック!



3 自宅から離れた地域(他県や地方)に避難する 「広域避難」も選択肢の一つ

長い避難所生活は、心身に大きなストレスがかかります。そんなとき、親族や知人を頼り、離れた地域に避難するの一手。住み慣れた場所からは離れたが、命と健康のための広域避難も想定しておきましょう。(防災ゼミvol.2より)



4 日常的に使うもので災害に備える 「フェーズフリー」で防災を強化

缶詰やカセットコンロ、寝袋など、普段の生活の中でも使う機会のあるものを中心に災害に備えておくことも大切な防災です。また、いざというときにこれらをうまく使いこなせるよう、普段から使い慣れておくことも大切です。(防災ゼミvol.5より)



vol.1

万博と赤十字

2025年4月に開幕する大阪・関西万博には、赤十字の理念を伝える「国際赤十字・赤新月運動」のパビリオンも出展されます。本連載では万博と赤十字の150年以上にわたる関係をひもときます。

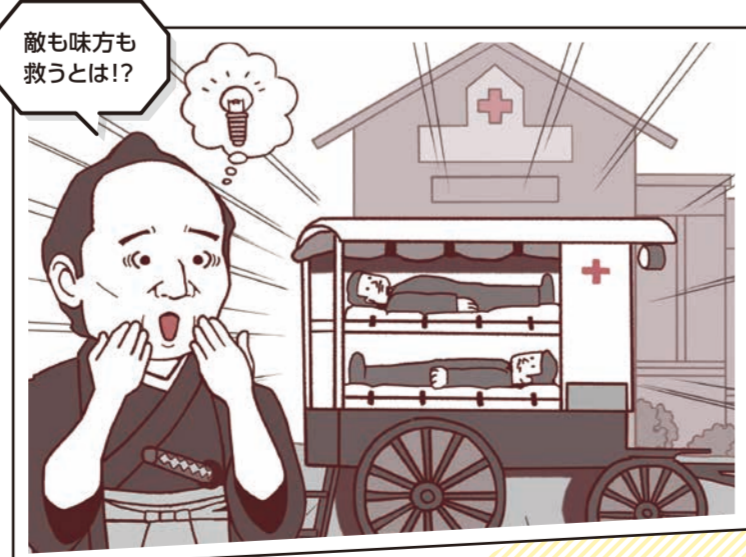


©Expo 2025

1867年パリ万博。日赤創設者・佐野常民が受けた衝撃とは

日本赤十字社の誕生は、創設者である佐野常民が、1867年のパリ万国博覧会を訪れたことがきっかけでした。会場には、幕府と共に出品した佐賀藩の藩士である佐野の姿がありました。この万博には、1863年に発足したばかりの赤十字も出展。医療器具や救急搬送用の馬車の他、ジュネーブ条約が紹介されていました。佐野は「傷ついた兵士はもはや兵士ではない、人間である」と敵味方の区別なく救うという理念に衝撃を受けます。日本の近代化を目指す一人として、革新的な人道の考え方に感動したのです。この誕生したばかりの国際赤十字は「守るべき命と尊厳」の価値を発信し、万博のグランプリを受賞しました。その後、佐野は明治政府の代表として1873年のウィーン万博にも派遣され、その経験を通じて日本の赤十

字社設立への思いをより強くしていきます。1877年、西南戦争で敵味方の区別なく戦場の負傷兵を救護するために、佐野は征討総督有栖川宮熾仁親王に嘆願し、日赤の前身である博愛社の設立にこぎつけます。1882年の博愛社の社員総会で佐野は次の主旨を述べました。「文明開化といえ、人はみな法律ができること、精密な機械ができることなどと言うが、私はそれだけだとは思わない。赤十字のような活動が盛んになることをもって、文明開化の証しとしたい」。万博によって世界に触れ、開明的な視点を得た佐野が、



敵も味方も救うとは!?

「人道」を重んじる真の近代化への一歩を日赤と共に歩み始めた瞬間でした。

献血ハートフルストーリー

vol.10

このコーナーでは、血液事業に携わる日赤職員、ボランティアさん、献血協力者などの人たちが、日々どのような思いで血液事業に取り組んでいるのかを紹介していきます。

小さな積み重ねが、やがて大きな実になる



今月のひと

profile
日本赤十字社
東北ブロック血液センター
所長 柴崎 至さん

時としてそれなくては命をつなげないもの。それが献血による血液から造られる血液製剤です。現在私は東北ブロック血液センターの所長ですが、以前は現場第一の外科医でした。その経験の中で、輸血は抗がん剤治療のような、いわゆる根治療法ではないけれど、苦しい闘病を続ける方々に生きる力を与えるものだと思

た。このまま臨床医として患者と向き合っていく人生だと思っていましたが、ご縁があり2013年に青森県赤十字血液センター所長、2021年に現職を拝命、「安全な血液を、安定的にお届けすること」が最大の責務であると真摯に向き合っています。実は、血液センター所長に就任後は、穏やかに過ごせると妄想を抱いていました。年齢を重ね、寝る間も惜しむ外科医のハードスケジュールに心身の限界を感じていたので…。しかし、献血を取り巻く状況を知るにつれ、何とかせねばとの思いに至りました。全国で若年層の献血者不足が進行していますが、東北は少子高齢化に加え、若者の転出によってその課題が顕著です。口下手な外科医だった自分が、気づけばまさかのトップセールスマンのように渉外活動へ出向き、協力団体と交渉し、献血セミナーを増やし、現場では献血者とふれあい、啓発活動にいそむ。献血バスに乗り込んでこ

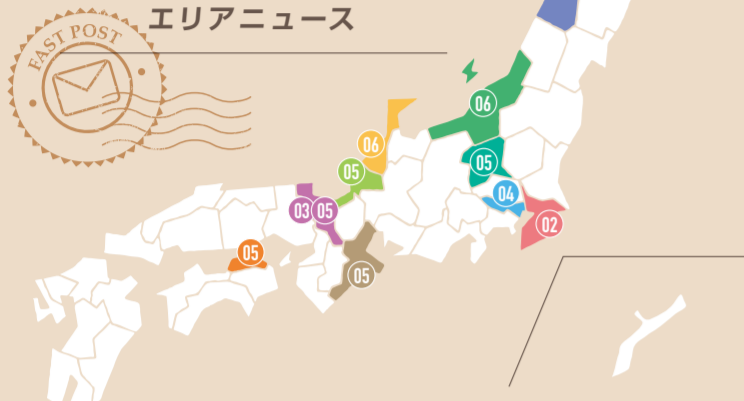
にでも向かいます。高校生献血に力を入れていると「いずれ地元を離れる若者を育てても…」という意見もありますが、「全国どこに行っても献血に協力してくれれば、全体の献血者が増えることが大事」と意を強くしていました。医者として「現場」の人間でしたが、いつの間にか献血でも「現場」に飛び込んでいました。やるべきことをしっかりと、今、目の前の小さなことを積み重ねていくことが、未来の献血を支えていくと信じています。



献血ルームで
問診中

Area News

エリアニュース



全国各地、あなたの生活のすぐそばで日本赤十字社の活動は行われています。

Area News



2年連続、大雨災害に見舞われた秋田 中学生が「災害エスノグラフィー」体験



昨年7月に続き、今年7月にも大雨災害が発生した秋田県。日赤秋田県支部では、7月18日、町立羽後中学校にて防災学習会を行い、3年生125人が参加しました。生徒たちは、非常用炊飯袋を使用した炊き出しや救急法の実習の他、「災害エスノグラフィー」にも挑戦。実際に被災した方が災害現場で何を考え、どう行動したかをありのままに記録・調査した「災害エスノグラフィー」を読み込み、被災を追体験。班ごとに、災害から命を守る行動について意見も交わしました。参加した生徒からは、「災害に遭った方の記録から、災害時

取るべき行動が学べた」「水害のときは早く安全な場所に避難することが大切だと気づけた。冷静に行動できるように備えておきたい」などの感想があげられました。



小・中・高の青少年赤十字が集合！ 全国でリーダーシップ・トレーニング・センター開催



夏休みに、全国の日赤支部で青少年赤十字リーダーシップ・トレーニング・センター(以下、トレセン)が開催されました。トレセンは子どもたちが自ら課題に気づき、考えを深め、実行する力を身につける育成プログラムで、多くは宿泊形式で実施します。京都府支部では、7月27日・28日に小学生60人が、8月5日・6日には高校生42人が、フィールドワークなどを通じてボランティアや共助の精神を学び、他者への気づきを深めました。三重県支部では、7月29日から8月7日に開催。2泊3日で実施された高校生向けトレセンでは、地震でガスや電気が止まってしまい、指導者もけがで動けないという設定で、自分たちで火おこしをしながら夕食を作りました。

子どもが成長する「トレセンの1日」京都の事例を紹介⇒



7月から8月にかけて開催された群馬県支部のトレセンは、コロナ禍を経て5年ぶりに2泊3日で開催。協力して競う室内オリンピックや救急法講習など、3日間のプログラムを通じて、生徒たちは「誰かのために一生懸命」となり、成長する姿を見せました。福井県支部は8月6日～8日に高校生トレセンを実施。「台風」「地震」など災害時に高校生がどう行動するかを探り、発表。フィールドワークでは赤十字パズルに挑戦し、理解を深めました。8月7日～9日に開催された香川県支部のトレセンには、小・中・高校生59人が参加。年齢や学校が異なる子どもたちが集団生活をし、防災教育プログラムやフィールドワークに臨んで「気づき、考え、実行する」力を育みました。



4年ぶり！ JRCメンバーが ネパールで国際交流



日赤千葉県支部では、青少年赤十字(JRC)メンバーの国際理解と親善を深めることを目的とした国際交流事業が、コロナ禍を経て4年ぶりに再開。JRCメンバー8人(中学生4人、高校生4人)が、7月29日から4泊6日でネパールを訪問しました。交流会ではネパール青少年赤十字(RCY)メンバーからの歓迎を受け、日赤JRCメンバーからは浴衣の着付けや書道、折り紙を紹介したり、みそ汁を振る舞うなど、日本文化に触れてもらいました。他にも、互いの活動を紹介し合い、全員で踊って盛り上がるなど、言語や文化の違いを超えて関係を深めました。世界各地で人道支援を展開するIFRC*のジャガン・チャパゲイン事務総長も若き日はネパールRCYで学び来日して理解を深めたように、国際交流事業は未来への種まき。今回も双方にとって、心に残る充実した交流となりました。

*国際赤十字・赤新月社連盟
*RCY=Red Cross Youth, 海外における青少年赤十字の呼称



救急法は15歳から？ 「何歳でも人は助けられる！」 小学校・高校で救急法講習



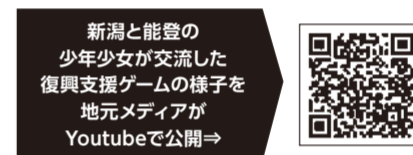
日赤京都府支部では、7月31日・8月1日、小学3～6年生向けに「子ども救急員養成講習」を実施しました。赤十字救急法基礎講習の受講は15歳からですが、苦しんでいる人を助けることに年齢制限はありません。体調が悪い人に「大丈夫ですか?」と声をかけたり、近くの大人を呼ぶことだって救急法の一つ。胸骨圧迫も、小さな体でもうまく体重を乗せれば可能です。参加した子どもたちからは「自分で人を助けられることが分かったし、楽しかった」などの感想が寄せられました。また、8月8日から11日には、JRC高校生メンバーが集まり、赤十字救急法基礎講習と救急員養成講習を開催。止血の方法や三角巾による包帯、骨折の固定や搬送法を学びました。参加者からは「救急法の技術を競い合う大会を開きたい!」といった前向きな言葉が聞かれました。



能登半島地震復興支援ゲーム開催 被災地の野球キッズも笑顔に



日赤新潟県支部・石川県支部は、7月30日と31日に新潟市内で開催されたオアシックス新潟アルビレックスBCと読売ジャイアンツの2連戦を復興支援ゲームと位置付けて能登半島地震など被災地の支援活動を実施しました。初日にはスタジアムで募金活動や災害救護車両の展示を行った他、被災地・石川県、新潟県の学童野球チームを招待。JRC指導者や赤十字奉仕団らとスタジアム見学や始球式などを行い、試合を観戦しました。2日目に開催した交流試合では、石川県チームが勝利。参加した子どもたちは、「久しぶりに野球ができて元気が出た」「たくさん友達とできてよかった」と、笑顔で語りました。



常任理事会開催報告

令和6年9月20日、令和6年度第5回の常任理事会が開催されました。今回の常任理事会では、大阪・関西万博への出展について報告しました。

PRESENT!!

地元の食材で地域の魅力を発信 企業と日赤の連携で防災を強化

今回は、代表が親子二代で赤十字有功会に加入し、赤十字への支援を続けるワンプライム(株)と、同社に共感して有功会にも加入する(株)ドットクルーの2社が共同販売するブランド「七金星」の商品をプレゼント。

鳥取を拠点とするワンプライムは、鉄道や公共の電気工事や住宅設備まで、地域のインフラ整備に欠かせない存在として事業を展開。一方、ドットクルーは衣料品や山陰地方の食材の販売を行う地域に根差した企業です。両社は鳥取で生まれた食材を「七金星」として商品化し、その魅力を全国に発信しています。このブランドからは一昨年、日赤鳥取県支部に米1トンが寄贈され、支援物資や炊き出し訓練、赤十字病院の病院食などに活用されました。また昨年には、青少年赤十字加盟校の鳥取城北高等学校の相撲部にも、米を始めとする食材が寄贈されました。この他、日赤と連携した社員への救急法普及など防災強化に努めています。

七金星セット
鳥取県産米5kg、星のきくらげ(乾燥きくらげ)1袋、星のふる里(だんご粉)1袋のセット

5名様

突然の地震! その時、あなたはどをする?!

とっせんはじまる 避難訓練

那覇市

LINEでできる
避難訓練

LINEでできる
避難訓練

8:30(日) - 9:13(日)

無料引換クーポンプレゼント!

訓練是那覇市とLINEヤフーコミュニケーションズが主催した



「とっせんはじまる避難訓練」を災害救護研究所がサポート

日本赤十字看護大学附属(東京都)の研究機関である災害救護研究所(災害救援技術部門 曾篠恭裕部門長)は、災害発生時に「家族を探す」「親しい人の安否確認」などの行動が避難の遅れにつながるという調査結果を踏まえ、自分が避難を開始したことを身近な人と共有することで、相手にも生命を守るための行動を促すアプリを考案しました。2019年から本アプリの機能は、福岡市LINE公式アカウントの「避難支援機能」の一部として活用されていますが、今回新たに那覇市の実施するオンライン避難訓練に生かされ、8月30日から9月13日の期間、「とっせんはじまる避難訓練」として展

開されました。この訓練は、那覇市公式LINEアカウントを友だち追加のうえ参加登録した方に、突然、訓練開始の通知が届くと共に、避難行動の選択や近隣避難所の検索、自身の避難行動を身の回りの人に共有できるものです。8月30日、訓練開始に先駆け那覇市内で開かれた記者会見では、那覇市市長や関係者と共に、本訓練を監修した曾篠部門長が出席。曾篠部門長は「命を守るための情報を、自身の避難行動と共に身近な人に伝えることは、身近な相手にも命を守る行動を促す」と訓練の重要性を伝え、同時に日頃の備えとして、日赤の各支部で実施する防災セミナーも紹介しました。

- プレゼント希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・WEBでご応募ください。
- お名前
 - 郵便番号・ご住所
 - 電話番号
 - 年齢
 - 赤十字NEWS10月号を手にした場所(例/献血ルーム)
 - 10月号読者アンケートの回答
- ※ご応募いただいた個人情報(住所)はプレゼントの発送および弊社からののお知らせに利用いたします
- ⑥ 10月号読者アンケート質問項目
- [A] 日赤の「会員」ですか
ア. 会員(年間2千円以上の寄付を継続している。但し、義援金を除く) イ. 会員ではない
- [B] 赤十字について知っている活動はどれですか※下記選択からAークの文字をご記載ください。複数選択可
ア. 国内災害救護 イ. 国際活動 ウ. 赤十字病院 エ. 看護師等の教育 オ. 献血(血液事業) カ. 救急法等の講習 キ. 青少年赤十字 ク. 赤十字ボランティア ケ. 社会福祉
- [C] 今月号の赤十字NEWSをお読みになって、以前よりも赤十字活動全体についての理解が深まりましたか
ア. とても理解が深まった イ. ある程度理解が深まった ウ. すこし理解が深まった エ. 以前と変わらない

- [D] 興味・関心を持った記事・企画はどれですか
ア. 特集 イ. TOPICS ウ. 万博と赤十字
エ. 献血ハートフルストーリー オ. エリアニュース
カ. プレゼント キ. ワールドニュース
- [E] 赤十字NEWSの適切な大きさは
ア. 今のまま イ. A4サイズ ウ. 小冊子(A5 148x210mm)サイズ
- [F] 赤十字NEWSの発行回数は何回がよいですか
ア. 月に1回 イ. 2か月に1回 ウ. 3か月に1回 エ. 半年に1回
- [G] 赤十字NEWSの記事をスマートフォンやパソコン(オンライン)で読みたいですか、いままでもり紙で読みたいですか
ア. オンライン イ. どちらかというオンライン
ウ. (オンラインと紙の)両方 エ. 紙 オ. どちらかという紙
- [H] その他、赤十字NEWSに関するご意見、ご要望(任意)

郵送/〒105-8521東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS
10月号プレゼント係

WEB応募/下の二次元コードからご応募ください。

10月31日(木) 必着

※当選者の発表はプレゼントの発送をもってさせていただきます

ご応募は
こちらから



台湾ってどんなところ?

九州よりやや小さい面積に人口約2342万人が暮らす台湾。今回の地震で最も大きな被害を受けた花蓮県は東部に位置し、東側に海、西側に山と、自然に恵まれた人気の観光エリア。大地震により、台湾でも有数の景勝地・太魯閣渓谷も閉鎖されるなど、主要産業である観光も大打撃を受けている。

台湾東部沖地震から半年 赤十字救助ボランティアの活躍

2024年4月3日に発生した台湾東部沖地震から半年が経過。被災地は落ち着きを取り戻してきているものの、今なお、至る所に被害の痕跡が残されています。今回は、発災直後から救助活動にあたった現地の赤十字ボランティアのインタビューから、当時は振り返るとともに、中・長期的な復興支援へと移行しつつある台湾赤十字組織の支援活動をレポートします。

救助活動の中核を担った 赤十字ボランティア

台湾東部沖沿岸をマグニチュード7.4の地震が襲ったのは、今年4月3日のこと。台湾東部・花蓮県では、最大震度6強を観測。建物の倒壊や土砂崩れによる犠牲者が18人、負傷者が1163人、行方不明者2人の被害が発生した他、花蓮縣市街地では、ビルが大きく傾くなど、452棟もの建物が損壊。1900世帯以上の家屋が解体や修繕が必要な状態に。人気の観光地である太魯閣渓谷では、発災直後は多くの人々が孤立状態となり、地震から半年が経過した今もなお閉鎖が続くなど、地域全体に痛ましい爪痕が残されています。

台湾赤十字組織(以下、台湾赤)・花蓮支部の救助隊は、発災から1時間半後には被災地に出動し、救助活動にあたりましたが、その中核を担ったのは赤十字ボランティアです。花蓮支部所属の救助ボランティアは男女あわせて32人。普段は小学校の教員や自営業など、それぞれの生活がある中でも、少なくとも月に1度は集まり、身体能力と技術力を磨く本格的なレスキュー訓練を行っています。ボランティア歴24年で、今回の地震でも救助隊の副隊長としてチームを率いたリン・チンファンさんは、当時はこう振り返ります。



リンさん

「発災直後、観光スポットの太魯閣渓谷で道路が寸断され多くの方が逃げられずにいると情報があり、私たちは消防隊員と共に捜索・救助活動のために渓谷に向けて出動しました。ところが、山の崩落や落石により、私たちのチームも8人が渓谷に閉じ込められるという危機に瀕しました。大雨の中、唯一残された脱出ルートは流れの急な溪流に飛び込むこと。必死に泳ぎ、なんとか無事に全員が脱出。これまで300回以上のミッションに参加してきましたが、確実な救助を遂行する

だけでなく、チームのメンバーの命や安全も確保しなくてはならないという、非常に過酷な状況でした」



ホアンさん

また、同チームの赤十字ボランティア、ホアン・リーさんとウェン・ルーセンさんは、「地震発生直後に、捜索と救助の要請連絡が届きました。私は家族の安全を確保してすぐに災害現場に向かい、被災地で閉じ込められている人々の救助を行いました。赤十字ボランティアの一員となり、これまでに学んできた救助の技術が、今回の地震での救助活動と、自分自身の身を守ることに繋がったと実感しています(ホアンさん)」



ウェンさん

「閉じ込められ、負傷している人々を見たとき、“この人々を救うために私は赤十字救助隊に参加したのだ”、と強い気持ち湧いてきました。私は、水泳が得意なのでライフガードになろうと思っていたところ、赤十字の共助の精神に感銘を受け、救助隊の訓練に参加するようになりました。人は災害が起きたとき、手を差し伸べ助け合うことができます。自分のできる範囲で、支援を提供することができるのです(ウェンさん)」と語り、また異口同音に「台湾で災害が発生するたびに、日本から惜しみない支援が届く。本当に感謝している。ありがとう、日本のみなさん」と言葉を結びました。



ザンさん

生活再建と復興支援のために 奔走する台湾赤十字組織

現地の水璉消防署も被害が大きく、台湾赤は社会インフラ施設建設支援の一環として、消防署再建を計画しています。水璉消防署の消防士、ザン・ジミンさんは、

「新しい消防署の建設、日本からの多くの支援に感謝します。台湾と日本のパートナーシップの深さを実感しています」と、感謝を述べました。

この他にも、台湾赤では花蓮県山間部の和平村における緊急避難所兼コミュニティセンターの建設支援も計画しています。

また、花蓮県の市街地には政府が「居住不可」と評価し、その旨を掲示した赤い紙を貼った建物が残ります。台湾赤は建物被害を受けた被災世帯に向けて、家庭用品購入のための引換券(各世帯約14万円分)の配布に注力。5月と7月に実施された引換券配布では、花蓮県と新台北市の計607世帯が受け取り、生活用品から家電製品など、各世帯が必要なものを購入することができるようになりました。

6月28日に受け付けを終了した「2024年台湾東部沖地震救援金」には28億9825万6045円もの支援が寄せられました。この救援金をもとに、日赤からは台湾赤あてにすでに10億5000万円を送金しており、残りについても追加送金を予定。台湾赤を通じてさらなる復興支援に活用される計画となっています。



落石により通行ができなくなった太魯閣渓谷の遊歩道
©台湾赤十字組織



川を泳いで渓谷から脱出した赤十字救助ボランティア。浅瀬から陸に上がる際に仲間同士でサポート
©台湾赤十字組織